



一般社団法人 日本ミャンマー友好協会

日本ミャンマー友好協会報

第161号

平成30年1月発行

発行人：米村紀幸
編集人：松尾義久

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 E-mail ●tzkosm@abelia.ocn.ne.jp http://jmfa-main.com/
●本部 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-20-1 住友不動産西新宿ビル15階 TEL.03-3371-5060 FAX.046-224-3011

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 Since 1970
Japan-Myanmar Friendship Association / ဂျပန် - မြန်မာ ချစ်ကြည်ရေးအသင်း



収録内容

巻頭言	2	映画紹介	15
平成30年度役員名簿	3	NHKスペシャル「戦慄の記録インパール」と慰霊法要	14
平成29年度総会	3	ビルマ方面戦没者大法要が開催	14
NHK「戦慄の記録 インパール」放送を終えて	4	大僧正に「協会報」を見ていただきました	14
ロビンジャー問題	4~5	支部だより	15
知ってますか!パゴダは寺院ではない②	5	会費納入のお願い	15
夢かなうミャンマーへの旅 そして父帰る	6~7	協賛企業	16
ミャンマー ビジネス ニュースダイジェスト	7	編集後記「ヤダナー」	16
インパール作戦：白骨街道への旅	8~11		
日本船「春天丸」のはなし	12~13		



日本・ミャンマー両国経済関係の更なる発展に向けて
ミャンマー経済・投資センターは当協会の付属機関になりました

写真：当協会総会で披露された民族舞踊 霞が関ビルにて（撮影／協会本部事務局）

当協会はミャンマー関係で唯一の外務省認可一般社団法人です。



巻頭言 当協会は今年も話題充実!



一般社団法人 日本ミャンマー友好協会

会長 米村 紀幸

皆様、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年8月、NHKでインパール作戦のTV番組が放映され、多くの人の関心をよびました。大変、評判がよく、先日、再放送されました。再放送版は、オリジナル番組より、時間が延長されたとのこと。我々協会の理事の水戸部さんがプロデューサーとして参加されており、嬉しいニュースです。

また、NHKの朝のTVニュースで、埼玉県鶴ヶ島市が2020年の東京オリンピックでミャンマー選手団のホストタウンになりミャンマーから関係者の訪問があったとの報道がありました。このご縁は、インパールです。

すなわち、インパール帰還兵の今泉氏が、ミャンマー人留学生のための奨学金制度を発足させお世話をしてきました。今泉氏は、鶴ヶ島に在住しています。そして、ミャンマー経済投資センター理事のテイテイ レイさんが今泉奨学金の理事長として、今回の橋渡しに貢献されました。94歳になる今泉氏が、矍鑠として、「私はミャンマー人に命を助けられました」と答えておられたのが、大変、印象的でした。

昨年9月、数人の方とマンダレー郊外のピン・ウ・ルインへはじめて訪問しました。ここは、インパール作戦の本部があったところで、感慨深いものがありました。

2017年のミャンマーの話題は、何といても、ロヒンギャ問題です。難民迫害という国際問題に発展したことは、大変、残念なことです。ミャンマーとしては、難しい内政問題、民族感情があるわけですが、対外印象を悪くし、ビジネス、観光など実害が生じたことも事実です。昨年、11月に実施したビジネスツアーでロヒンギャ問題を理由にキャンセルした人がいて驚きました。勿論、訪問したヤンゴン、マンダレーは治安上全く問題ありませんでした。

ミャンマーとしては、早い時期に立場を明確にしたほうがよかったのではないかと思います。ただ、暴力問題があったことは、マイナスでした。国際非難的になってしまいます。

事実を確認しておく必要がありますが、ロヒンギャは、いわゆるミャンマーの少数民族として認知されておらず、不法移民であるというのがミャンマー政府の主張であり、政府のみならず、軍、国民の間で共通の認識となっています。日本大使館は、この立場を支持しています。いわゆる「難民」としてメディアに取り上げられ、国際問題化されていることにミャンマーの人々は、事実関係が違おうと、国民感情として受け入れられないでしょう。

ミャンマー経済投資センターとしては、通常の例会のほか、3月には、マンダレーで中小企業セミナーとビジネスマッ

チングを行いました。また、11月には、武蔵野銀行、千葉銀行の各々のシンクタンクの共催により、ヤンゴン、マンダレーを訪問し、それぞれの商工会議所との会合、ビジネス交流、工場見学4件、テイラワ工業団地視察、現地駐在員との会食などのプログラムで実施しました。センターとして、アレンジに協力し私も同行しました。今後も、要請があればこのようなプログラムを実施していきたいと思います。

また、この機会にマンダレー商工会議所とのMOUを締結することができ、1つの成果がありました。マンダレー商工会議所としては、日本とのMOUはわれわれが最初とのこと。これをベースとして、今後、一層、マンダレー地域との交流を深めてゆきたいと思います。

協会の年初めの事業として、1月19日、築地本願寺でミャンマー映画とシンポジウムを開催します。これまで、ミャンマー祭りでも、ミャンマー映画を上映してきましたが、昨年は諸般の事情でミャンマー祭りが開催されませんでしたので、今回、このような企画をしたものです。前回、同様、協賛いただいた企業、関係者に厚く御礼申し上げます。

1月15日 記す



一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 平成30年度役員名簿

会 長	米村 紀幸	理 事	丸山 憲治	監 事	藤村 建夫
副 会 長	高松 重信	理 事	渡邊 奉勝	監 事	柴崎 等
副 会 長	高橋 秀夫	理 事	イーイーミン	監 事	古川 健士
専 務 理 事	都築 治	理 事	イイキン	名 誉 顧 問	千野 皓司
常務理事(事務局長)	三宅 紘一	理 事	キンチー	顧 問	田島 高志
常 務 理 事	山下 賢一	理 事	伊藤秀以智	顧 問	山口 洋一
常 務 理 事	新美 鉄雄	理 事	水戸部麻里	顧 問	津守 滋
理 事	山田 長満	理 事	角谷 猛志	相 談 役	安城 欽寿
理 事	田中 進	理 事	浅野 静二	相 談 役	池田 正隆
理 事	松尾 義久	理 事	湯ノ口俊市郎		

支部：関西、関東、愛知、四国、ヤンゴン、三重

一般社団法人日本ミャンマー友好協会 平成29年度総会が無事終了しました。

総会は、去る平成29年6月25日(日)霞が関ビル35階東海大学
校友会館において総数50人以上の参加者を得、盛会裏に終了
することができました。

大使館からは、トゥーレインタンジン大使閣下以下7人の方のご
出席があり、当協会に対する期待度が感じられました。当会の益々
の進展を願いつつ来年度も同じ会場で、6月24日(日)に開催する
予定です。



挨拶の言葉を述べる米村会長(右)と三宅常務理事



祝辞を述べられるトゥーレインタンジン大使閣下



ミャンマーの伝統舞踊



乾杯の音頭を取る高橋副会長



一同記念撮影。全員が映らず、退席された方もあり残念！



栄えある文化庁芸術祭優秀賞(第72回)受賞!

水戸部プロデューサーからのメッセージです

NHK「戦慄の記録 インパール」放送を終えて

NHKプロデューサー
当会理事 水戸部麻里

昨年夏、終戦記念日に放映されたNHKスペシャル「戦慄の記録 インパール」の制作に携わりました。

NHKのエグゼクティブプロデューサーの方から「インパールの番組をぜひ作りたい。今まで何度か提案をしているが、なかなかうまくいかない。証言してくれる人もどんどんいなくなり、もうあまり時間がないので、何とか成立させるために力を貸してほしい」と依頼されたのが、2015年の暮れでした。そこから、1年かけて企画成立のために伊藤理事とともに尽力し、昨年ついに制作がかない、8月15日放送の運びとなりました。

おかげさまで非常に反響が大きく、ツイッターやSNS・ブログ等を通じて、私の元にもたくさんの感想が寄せられました。

インパール作戦での悲劇に、悲しみや怒り、ぜったいにこんなことが再び起きてはいけぬ、という思いを新たにさ

れた方々の声。そして、過去の戦争の悲劇ということを超えて現代日本社会の理不尽さを、自分の身に重ね合わせながらご覧になった方たちが非常に多かったのが、大変印象的でした。

昨年春から放送されていた、NHKの連続テレビ小説(朝ドラ)「ひよっこ」では、ヒロインの叔父「宗男おじさん」が、インパールの生き残り、という設定でした。

このドラマで「インパール作戦」に興味を持ち、番組を見てくださった方も多いようです。

ドラマの中で、宗男おじさんがイギリス兵と出くわした時のことを語るシーンがあります。時を経て、彼はビートルズのコンサートへ行きたいと、茨城から出てくるのですが、ビートルズが初めて来日したのは、1966年6月末。それから約1カ月後の同年8月2日に、牟田口廉也元

中將は亡くなっています。

「愛の歌」を携えてイギリスからやってきたビートルズと、時を同じくしてこの世を去った牟田口元司令官。象徴的な出来事のような気がしてなりません。

自分が戦争ドキュメンタリーに関わるとは、数年前まで夢にも思っていませんでした。ミャンマー、そして関係者の皆さまとご縁があって、この番組に携わる機会をいただけたことに感謝いたしますとともに、ずっと封印してきた記憶を絞り出すように語ってくださった方々の言葉・メッセージを伝え続けていくために、今後も務めてまいります。

報道発表	文化庁
平成29年12月27日	
平成29年度(第72回)文化庁芸術祭賞の決定について	
文化庁では、広く一般に優れた芸術作品を鑑賞する機会を提供するとともに、芸術の創造と発展を図り、我が国文化の向上と振興に資するため、昭和21年から芸術祭を毎年実施しています。この度、平成29年度文化庁芸術祭賞を別紙(略)のとおり決定しました。	
(関西プレスクラブ同時提供)	
1. 参加公演・作品及び審査	
平成29年10月2日(月)から11月10日(金)の期間に、関東・関西で行われた演劇41件、音楽42件、舞踏34件、大衆芸術57件の参加公演及び10月1日(日)から11月30日(木)の期間に放送されたテレビ・ドラマ18作品、テレビ・ドキュメンタリー41作品、ラジオ30作品並びにレコード33作品の参加があり、高い独創性や企画性などを基準として、部門ごとに審査を行いました。	

ロヒンジャー問題についての私見

合同会社TCMミャンマー 代表パートナー
中小企業診断士(当協会専務理事)
都築 治(Aung Moe)

昨年の8月以降、ロヒンジャー問題がメディアを大いに賑わしています。これに対してミャンマー政府は、ロヒンジャーなどと言う民族は存在しなく、バングラデシュからの不法移民のベンガリだと説明しています。

バマー族がミャンマーの地に定着し始めたのは9世紀ごろからと言われてます。これに対して、ロヒンジャー族は8世紀、9世紀からミャンマーに定着した先住民族の一つだとして主張していますが、これにはいかなる資料もミャンマー側では見つかりません。

大航海時代に先駆け、ムスリム商人らがベンガルに定着しました。が、次第にポルトガル人などとの競争に敗れ、地

方の片隅で暮らすしかなかったと考えられます。15世紀から18世紀にラカイン州で栄えたミャウツウー王朝に、傭兵や従者として仕えた者たちもいました。1784年同王朝滅亡後、彼らはベンガルの地に戻ることを余儀なくされました。彼らムスリム商人の末裔が、いわゆるロヒンジャー族の一部だと私は考えます。ロヒンジャーは一般のベンガル人とは容貌が違い、生活慣習も違っているとされています。したがって、バングラデシュ国からも自国民とみなされていません。

ポルトガル、スペインなどはイギリスとの競争に敗れ、現在のパキスタン、インド、スリランカ、バングラデシュ、マレーシアなどはイギリス領となりました。19世紀には、

ミャンマーはインドの一州として隷属させられました。この時期、インド人、中国人らをイギリスは領土開拓のために大量にミャンマーに移住させました。ロヒンジャーと言われている人たちも同様です。ミャンマーは、イギリスに抗うことはできないようにさせられ、バマー族の上の地位にいたのがインド人、中国人、カイン族、カチン族などやロヒンジャーです。ほとんどのバマー族は、最下層の小作人の地位に追いやられました。

20世紀に入り、ミャンマーはイギリスからの独立の機運が急速に高まりました。独立の英雄と言われているアウンサンらは、日本軍と協力してイギリス勢力を駆逐しました。この時、カレン族、カチン族、

チン族などと一緒に、イギリス側の兵としてロヒンジャーは参戦しました。ミャンマーは独立後、これらの民族らとの反目がさらに高まることになります。

大戦後東パキスタンとして独立した東ベンガルは、ほどなくしてバングラデシュとして分離することとなりました。この時の混乱に乗じて、ベンガルからミャンマーへの大量の移住がありました。また、頻繁に襲うサイクロンや洪水から逃れるため、ラカインへ不法移住した者も多数います。これらのため、ミャンマー政府は彼らをベ

ンガルからの不法移民とみなし、ミャンマーに数多ある民族の一つとして数えていません。

幾世代も前からミャンマーに住んでいる家系の人々には、インド系、中国系、グルカ系などを問わず、ミャンマー政府は国籍を与えています。また、インド系の半数以上はムスリムで旧ベンガル州の出身ですが、彼らですらもロヒンジャーとは一線を画しています。バングラデシュとの国境に近い地方では、ラカイン族の方がむしろ少数派で、不法移住したロヒンジ

ャーの方が多数派になっています。イスラム教の少数民族ロヒンジャーと言う表現は全く正しくありません。

現在のロヒンジャー問題の遠因は、イギリス統治時代の異民族の大量移住政策と名高い分割統治にあり、一層複雑な様相を呈しています。イギリスは自国の所為だと認めると、大英帝国時代の負の遺産が次々と世界各国で問題視されることとなり、人道的側面を強調して、ミャンマー国軍にその責任を押し付けています。 <2017.11.7 記>

ミャンマー事情

知っていますか！パゴダは寺院ではない② —パゴダと寺院の違い—

都築 治

ミャンマー仏教の研究者で僧侶である生野善應師は、「ビルマ佛教寺院は、村落部では単独に存在し、都会では普通、土堀で囲まれる一つの境内に数寺院が集合して大規模な僧院を形成していることが多い。」(「ビルマ佛教 その実態と修行」大蔵出版)と記し、寺院は僧侶が修行し、寝食する場であるとしている。



日本で刊行されているミャンマー関連の書物では、「寺院とは本尊となる仏像が飾られ、中に入って参拝することができる宗教的施設である」と定義し、アーナンダ・パトーやダマヤンジー・パトーを、それぞれアーナンダ寺院、ダマヤンジー寺院と呼んでいる。しかし、マハムニ・パヤーなどは塔内に仏像が安置され礼拝されているが、寺院とは言わない。

原田正春・大野徹著「ビルマ語辞典」では、パトー(PAHTO)を「レンガ造りのパゴダ」、また「内部に回廊をもつ寺院」と定義している。ミャンマー教育省

発行の「ミャンマー語辞典」では、パトー(PAHTO)を「煉瓦造りの仏塔」と簡潔に定義し、同じく「緬英辞典」では「アーチ形の基部を持つ塔」とのみ定義している。パトーを寺院(ボンジーチャウン)とは定義していない。

小学館発行の「国語大辞典」では、寺を「仏像を安置し、僧や尼が住んで、仏道の修行や仏事を行う建物。寺院。」とし、寺院を「寺とそれに付属した別舎の総称、また寺をいう。」としている。また僧院は、「寺で僧侶の住居である建物、また、広く寺院をいう。」と定義している。また、ミャンマー教育省発行の「ミャンマー語辞典」では、ボンジーチャウン(寺院)を「出家僧侶たちが修行する建物」と定義している。

ここで少し疑問がある。それは、日本語に適應する言葉がないためか、アーナンダ・パトーやダマヤンジー・パトーなどを、寺院と表記していることである。パトーは、明らかに上記の定義からして寺院とは言えない。私はその形状と実体からPAHTOを「塔堂」と訳してみたい。パトー内で僧侶が寝食し、仏道の修行をすることはない。

以下パゴダと寺院の違いをまとめて見ると、パゴダ(仏塔)は在家の信者が管理して運営を行っており、パゴダ祭等の行事は僧侶とは直接の関係なしに一

般の信者が執り行う。僧侶はそれらについては関知しないし、パゴダの境内に居住しない。



一方、寺(寺院・僧院)は、在家の信者の布施によって成り立っているが、運営は出家の僧侶に委ねられている。そこで生活して、仏事や仏道の修行を行っている。パゴダ(パヤー)は一般信者の信仰の場であり、寺院・僧院は和尚(ボンジー)及び見習い僧(コーイン)の修行の場である。





戦後72年、なんと長い年月だったことか！

暎の父を偲ぶ涙涙の慰霊の旅

夢かなうミャンマーへの旅 そして父帰る

楠田倫子(兵庫県在住)

澄み渡る青空で国内線の音がゴーゴー聞こえます。あの旅からしばらく経ち、懐かしく思い出しています。三月三日雛祭りの日、成田空港より「行ってらっしゃい」の横断幕で見送って貰う。日本とはしばらくの間お別れと、両手で勢よく振り返した。急に熱いものが込み上げてきて目の前が霞んでいった。父の国へと、期待に胸が膨らみながらも涙がなぜか流れた。

やがて、離陸となって成田の街がだんだん小さくなり太平洋へ出た。機内は快適で、CAさんの優しさに心が和みジュースを頂く。外は海なのでアイマスク着用でしばらく休む。目覚めるとランチタイムとなり、日本食を一口一口噛みしめた。やがて6時間30分が近づいて、間もなくヤンゴン空港に到着とのアナウンスに胸が騒ぎ、窓の外を見ると雪山のような白い雲が連なり出迎えてくれる。眼下にはグリーンの田園風景が近づき、目に優しく映る。

そしてヤンゴン空港に無事着いた。2年前に新しくなった国際空港は綺麗で、通路の絨毯がふかふかで雲の上を歩いている感覚だった。到着ロビーでは、ネームボードでお迎えのガイドさんと車中のドライバーさんに挨拶。それから



宿泊する素敵なホテルに到着。すこし休んでから、スーチーさんの父君のオフィス跡のレストランで夕食となり、心配だった食事ガイドさんと美味しく頂いた。そして疲労感マックスの私を、父の国ビルマは優しく包んでくれた。

翌朝、父の眠る夢にまで見たシタタン河を目指す。大きなオレンジ色の太陽が私を励ましてくれる。賑やかな車列と車の多さに不安を覚え、緊張の中にもビルマの大地の香りを探す。父がかつて苦戦しながら歩んだ遠い道りを私は車で進んだ。「戦後70周年誌」で、ビルマ地獄の敗走を振り返る帰還者の記述がとても悲しく思い出された。日本軍死者19万人が静かに眠るビルマの地。その戦いの魔のシタタン河が見えた時、暎が熱くなった。

英軍の爆撃で半分残った橋が激戦の様子を語りかけた。ゆったりと何事もなかったかの流れの大河が私は無性に憎らしく思えた。そして、川沿いの林の中で横たわる大小の石のある場所で、最初の日本式の供養で合掌。ガイドさんの説明に心が痛んだ。次に寺院の中にひっそりと河を背にして建つ「シタタン河渡河作戦戦没者慰霊の碑」の前に立った。

長い長い間、この場所を見たかった、希望していた所がここにある。「生後すぐ別れた娘が、こんなに年老いて日本から迎えにきました。父さんの娘ですよ。わかりますか。お父さん。」と、何度も呼びかけた。夢にまで見た河。多くの人の悲しみや恨みが今もなお沈む、魔の河。残り少ない人生の娘がやっと辿り着きました。父さんの迎えに間に合いました。

しかし、涙でくしゃくしゃになりながら恋しい思いが沸いてきた。「もう眠らなくても良いから一緒に帰りましょうね。」と告

げた時、息が苦しくなった。写真の父に何度も言っていた。「お酒も戦友と飲んでね。お供えも色々ありますよ。」心から日本式の供養と合掌ができた。嬉しくて満足で充実していた。性根尽きた感で車に戻った私に、ガイドさんとドライバーさんの慰めがとても嬉しかった。

高速が走る河に掛かる近代的な赤いアーチ型の橋を渡り、巡礼地へ向かう。覚悟の決断で標高1100mの山へと登る。そこは山々が厳かに連なるゴールデンロック、お釈迦様への参拝の所。本日のお礼とこれからのご加護を祈願する。足の都合で私はホテルで拝し、ガイドさんをお願いして写真に収めてもらった。

翌日、日本軍が休息をさせて貰ったという寺院に寄った。そこは木陰がとても涼しくて、ひと時の安らぎで体を休められた所と思った。供養と合掌。そのあたりはモン州で、父の軍歴上最後の地である。このあたりからシタタン河への死の行進が始まった。負傷兵を看護する野戦病院が置かれた場所も見なかった。小さな駅舎が今もある。多くの兵を看ている父の姿が浮かんで見えた。合掌姿の私を、父の足跡を偲び写真に残す。父と一緒になれた様な気がした。

ビルマともお別れの日、日本大使館が営む日本人墓地で、最後の供養を今まで同様行って合掌。そこにある参拝誌には近日にも日本からのお参りが記され、私も記載して残す。その場所に供えてあった白い菊と、グラジオラスの花が心に残っている。すべて終了の時、なぜか私は倒れた。張りつめていた何かが消滅して行った如くに。ガイドさんの腕を頼りに車中の人となり、少々のお買物の後にヤンゴン国際空港へと向かった。

手続きはガイドさんの親切に甘えた。とても助かった。別れの時に、ドライバ



一さんから「忘れないよ。またあいましよう。」のメッセージを涙で読んだ。ガイドさんは留学経験があり、日本語が上手で娘の様にコミュニケーションが取れた。別れがとても辛かった。「又きて下さいね。」の言葉に涙が止まらなかった。

やがて、夢叶って日本へのフライトです。父も一緒なので少しも寂しくなかった。夜のANAの待合室で、広い中ポツツリ居る時、この旅の事が走馬燈の如く思い巡った。まずは、三年続いて護国神社のおみくじが大吉だった。そんな

中、いつも「願い事はかなう」とあった。不思議な力に背中を押して貰い、両手を取って導いて頂き、考えられない幾本もの救いの手のサポートがありました。

そのすべてに、心より感謝の念でいます。決して一人では叶わなかった遠いビルマへの旅。ずっとずっと夢見てきた場所への旅。長年の願意と、今でも解明出来ない勇氣、そして「今しかないよ」の風に強く押され、3つのスクランブルが渦のようになり不思議なエネルギーが生まれ、年老いて弱い私を決断させ導いてくれました。

本当に今も夢か現実か分からない思いますが。ともあれ、まだ寒さが残る日本へ父帰る。“これから娘と一緒にいましょうね。目の当たりにした日本の変化に啞然としていますか。長い間待たせてごめんなさい。懐かしい故郷です。美

しい姫路城ではお花見で乾杯しましたね。悲しい別れの原点、姫路54師団の場所が涙の所から笑顔の所と変化することを願います。百歳過ぎの父の杖となってもらうのは私の夫です。宜しく頼んでいます。高齢者の娘に少しでも親孝行させて下さい。あと少し共に楽しく歩いて行けたら幸いです。まずは温泉行きですね。”

最後に、もう一度ビルマの旅に際して親切なサポート、アドバイス頂いた方々に心よりお礼申し上げて、懐かしく遠いミャンマーへの旅を終わります。(感謝)
平成29年5月記



ミャンマー ビジネス ニュースダイジェスト 日緬関係のニュースをピックアップ

ヤンゴン市の鉄道網新設

日本政府も参画 ヤンゴン市内の高架式鉄道、2020年着工へ

ミャンマー国鉄プロジェクト部長のパ・ミン氏は、2020年からヤンゴン市内で高架式鉄道の建設工事を開始すると発表した。昨年12月15日に行われた記者会見での発言を7Day Daily紙が12月16日に伝えた。同部長は「これまで電力の供給に不安があったため高架式鉄道の建設計画が進まなかったが、2020年には電力の安定供給ができる見込みのため2020年から建設工事を開始する。開通は2024年になる見込み」とコメントした。

発表によると、同計画は日本政府、ミャンマー国鉄、ヤンゴン管区政府、

電力・エネルギー省の4者により開発するもの。南北線はダラ～ミンガラドン、東西線はラインターヤーからヤンゴン市内中心部を通りダゴンニュータウンを結ぶ。(2017.12.27)

ヤンゴンに高速道路と地下鉄の建設を検討 日本政府との協議続く

建設省とヤンゴン管区議会、交通・通信・建設・工業委員会が、ヤンゴン市内に高架式高速道路と地下鉄の建設を検討していることがわかった。The Voice紙が昨年11月29日に伝えた。

11月24日に行われた建設省の会議で同省のウイン・ティン次官が「ヤンゴ

ン市内の交通渋滞を解決するために、高架式高速道路と地下鉄の建設工事を2020年に開始できるよう日本政府と協議を続けている。日本政府から融資が得られ次第、すぐに工事を開始したい」と述べた。

高架式高速道路はヤンゴン市内ダウンタウンのポータウンパゴダとトゥワナ、南オカラッパ、北オカラッパ、ミンガラドンを結ぶ。地下鉄の建設については、地場のシュエ・ヤダナーアウン社がヤンゴン管区政府のピョー・ミン・テイン首相に提案書を提出している。

(2017.12.13)

提供

JICAミャンマー鉄道方策&技術顧問 高松重信(当会副会長)



ミャンマー紀行 歴戦の跡をたどる インパール作戦：白骨街道への旅

(一社)日本ミャンマー友好協会
監事 藤村 建夫



道路を補修しているところ



路肩に流れ込む雨水



テイディム方向を望む



出所：角川文庫、NHK「責任なき戦場インパール」

インパール作戦で敗北した日本軍は、甚大な損害を被り、戦死者・戦病死者は3万人以上と言われている。彼らの多くは戦闘による死亡よりも、撤退する途中の道でマラリア、アメーバ赤痢のような病気と食料不足による死亡の方が多かったとされる。特にタムからヤザジョー、インダンジー、カレミョーに

かけての南北の道路は膨大な数の兵隊が街道に沿って死亡し、白骨と化したことから「白骨街道」と呼ばれている。

そこで、日本ミャンマー友好協会として、将来、「鎮魂とエコツアー」を合わせた目的で「ミャンマーへ鎮魂のエコツアー

一」なるものが可能かどうか考えるために、とりあえず、33師団の山本支隊が歩いた道でもある白骨街道がどんなところか、見てみたいと思いつき、2016年9月5日から8日まで旅行した。今回訪問したのは左地図の下部の部分である。

Kalemyo付近

カレミョーはヤンゴンからマンダレー経由の飛行機で2時間半。弓師団(33師団)が滞在したところだ。Majesty Hotelにチェックインした後、すぐにカレミョーの北西側にあるティディムに向けて出発した。途中にカレー大学があり、キャンパスの中を少しドライブしてみた。非常に大きなキャンパスで、立派な建物と宿舎があった。キャンパスの北側のところで日本兵が埋められたところがあるという。近くには中小企業の工業団地が設置されていた。その後、道は山道になり、道の両側は頻りに雨で路肩が崩れていた。かなりの雨が道路をぬらし、路肩を崩して流れている。道を修復している会社の人達が休息しながら、道路の補修をおこなっていた。

現在の道路は戦後に拡張されたもので、戦前の道路は、道幅が狭く、戦車がなんとか通れるような道であったようだ。道幅は12~15mはあるものの、道路の山側はところどころ削られて、小さな小川のように雨が流れ出ている。また反対側はざっくりと路肩が削り落ちて危ないところもあり、とても危険な感じである。2時間も山を登ってもティディムまでは行けそうもなく、暗くなってきたので、ホテルに戻ることにした。午後6時にホテル着。

IndainggyiからTamuへ (印緬友好道路を北上)

翌朝、ホテルを9時に出発して約15分でIndainggyiに到着。ここはKalemyoから東に来て、北にTamuと南にKalewaに行く道の三叉路である。この北上するTamuへの道路こそが「白骨街道」と呼ばれた、日本軍苦難の撤退路であった。Indainggyi村の郊外には、第十五軍司令部が移動し

て、インパール作戦を指導していたという。ここには野戦病院も設置されていた。



ここを左折して、Tamuへの道路を北上する。この道路はMyanmar-India友好道路と名付けられている。10時にYazajolに至り、ここから佐久間大佐の214連隊が左折してTonzanに向かったことを知る。ここには割と大きなMitha川とダムがあり、2015年7月に大洪水があった傷跡を川の中と両岸に見ることが出来た。



ダムは満水で、大きな木の根っこ等が川の中や岸辺に放置されている。この辺りも雨季には猛烈な雨が降ることがわかった。しばらく行くと北緯23度の北回帰線の標識に出会う。道路の途中にいくつもの橋があるが、その幅が3~4mと極端に狭く、戦前のものかと思われるような錆びた金属製の橋で、バス1台通るのがやっとである。インド・ミャンマー友好道路という割には、このような小さな橋を何故そのままにしているのかが、納得できない。途中にはところどころにチン族の町がある。この道路が走っているところがいわゆるカボー谷地といわれるところの道路だが、この道路は従来の道路から数キロ西側に新たに作られた道路であるという。したがって、昔の白骨街道はこの東側数キロにある道だという。更に北上し、2時間あまりでTamuまでドライブする。イギリス軍は

ここらあたりの住民に対して、日本軍が来る前にインド側に移動させて、日本軍の食糧供給ができないようにしたのだという。



Tamuから国境へ

12:40分にTamu町のインド人のレストランで昼食をとる。昼食後13:20分に国境に向かう。国境直前に川があり、Kanghiwa橋が架かっている。ここはまだミャンマーの国内ではあるが検問があり、パスポートを見せる。そこを抜けばしばらく行くと国境の町がある。ミャンマー人は国境の検問所を通過して、インド側に入っていくことができるが、日本人は駄目である。



この商売人は多くがインド人とミャンマー人である。面白いことに中国からトラックで運ばれてきた衣類や電気器具の日用品(中古品も含む)や果物がたくさん店で売られている。また、インドの繊維製品もたくさん売られているが、肝心のミャンマー製品が殆どないというのが、不思議である。





国境の町には、中国から来た大きなトラックが列をなして止まっている。また、ミャンマー側もインド側もゴミが溢れて捨ててある。川の兩岸もゴミの山だ。この町にはゴミを処理するということが政府にも住民の頭にもないのだろう。山本支隊が通過した時も同じような町のたたずまいだったのであろうか？

国境の町から元来た道を引き返し、南下する。30分進んだところで左折してMintha Meeへの道に進む。5分ほどで三叉路になり、そこを左折してYuatha村を過ぎて北に向かう。インド・ミャンマー友好道路に並行して北に走る、この幅4m位の細い道こそが白骨街道かと思われた。この道は両側に雑草が生い茂り、それが切れると畑になっている。15分ほどでMintha Mee村に着いた。



その喫茶店で村の古老に聞いたところ、Mintha Mee村は洪水で埋まってしまったそうで、この村は新しいMintha Mee村だという。元の村から1マイル(1.6km)西側に位置しているという。村人の話では5マイル先の山の麓に日本軍のベースキャンプの跡地があるが、雨季はアクセスが悪くてバイクで行かないと行けないそうだ。1996年に日本人のグループがやってきて、その跡地を見に行ったという。現在ではマalariaはこの辺りにはないが、山の方にはあるかもしれない、とのことだった。

午後4時半にそこを辞して、インド・ミャンマー友好道路に戻り、再び南下する。Indainggyi村に到着し、Kampat町で戦時中にその付近にいたという81才の古老に面談した。



彼の話では、1944年から45年まで、イギリス人が来て、「日本軍が来るからインドに移住せよ」と指示されて、インドに移り住んだという。他の村人は、日本軍の基地(司令部のようなもの)が村はずれのゴム園の辺りにあり、時々日本兵が食料の調達のために村に来ていたと聞いているそうだ。日本兵は、子供たちに歌を教えたりして、皆、親切であったという。牟田口司令官もメイヨーから、ここに移動してきたが、その後、前線に出て、33師団の指揮を自分でとったといわれている。



翌朝、Ma Yuさんの案内で、近くの元第39小学校を訪問した。今では私立の小中一貫校になっていた。校長先生の話では、2015年まで、元日本兵数人が毎年慰霊に訪れて、校庭の隅に生えている大きな木に慰霊碑をかけて慰霊していたというが、その慰霊の碑は落ちていて、見当たらなかった。そこには、7~8人の元日本兵が埋められており、記念に苗木を目印として植えたとのことであった。最近では来なくなったのだという。



10時半にカレミーヨを出発し、途中の道路が良くないとのことで、インダンジーを通らず比較的道の良いMitha川の右岸に沿って南下した。11時半にチンドーウイン河とMitha河との合流点である、Karewaに到着。川幅が約800mもある雨季のチンドーウイン河の濁流を見た。かつては、ここに日本軍の工兵隊が仮設橋をかけていたとのことで、近くの雑貨屋にその写真がかけてあるが、その橋は今は存在しない。近くの高台にあるパゴダから見たチンドーウイン河はまさに大河にふさわしく、時折、上下する定期便の船が非常に小さく見える。船が直接に川の棧橋に近寄れないため、乗降客は小さな船に乗り換えて乗降しているようだ。



カレワには磯田さんという元弓33師団の日本兵の方が、「自分は村人に救われた」ということで、戦後、何度も訪れ

て水道タンク・システムや消防自動車等の寄贈を行ったとのことで、町の人達は懐かしんでいた。磯田さんはミャンマーに来る途中、2003年にバンコックで亡くなられたとのことであった。磯田さんはTonheには小学校を寄贈し、Daw Thi Thiさんを日本に招待されて、人材養成もされたという。



昼食後、1時半に出発。途中雨で滑りそうな悪路を悪戦苦闘しながら、午後5時半に新しいチンドーウイン河の橋を渡り、7時過ぎにモニワに到着した。山の中の道路はいたるところで傷んでおり、バラスを横に置いて補修している箇所が多かった。また、村人が捉えた鹿を紐でぶら下げて調理しているのも見かけた。

9月8日、午前11時40分に、モニワで有名なThanboddhay Templeを訪問した。数万個の仏像が所狭しと飾られている寺院は大変煌びやかであった。12時10分には、仏様の立像と寝ている姿の二つが存在するところに行き、これらを拝観した。世界中にある仏の



立像の写真が飾ってあり、日本の牛久町の立像よりも高いとのことであった。

午後1時半にサガイン市内に到着。2時20分にエラワデイ川にかかる新アバ橋を渡って、マンガレーに向かった。昼食後、3時15分にレストランを出て空港に向かった。

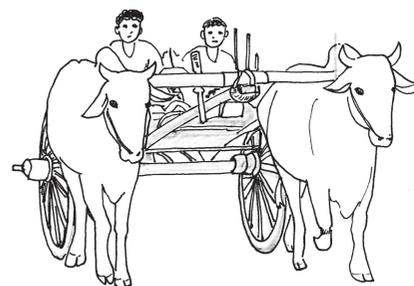
この旅行を終えて、東京に9月10日帰国した。すると1週間後に突然左肩甲骨の右横がズキンズキンと痛み始めた。これはおかしい、と不思議に思われ、ミャンマーにいた30年も前に、元日本軍の慰霊団の人達が話されていたことを思い出した。彼らは「慰霊から日本に帰ると、両肩の辺りがすごく重くなるんですよ。それでのお寺に行き、お経をあげてもらいと、両肩がスッと軽くなるんですよ!」というのだ。

私は「もしかしたら、英霊が自分にもくっついてきたのではないかと、直観し



たので、すぐさま靖国神社にお参りに行き、どうぞ戦友と安らかにお休みください!とお祈りした。その結果、痛みは少し和らいだような気がした。その後、日本ミャンマー友好協会の三重支部が設立されることになり、事務局の人達と一緒に松坂を訪問する機会があった。翌日、角谷さん達のご厚意で、伊勢神宮の内宮と外宮を訪問することが出来た。そこで「天照大神様、どうか背中元日本兵の皆さまに安らぎをお与えください」とお願いした。すると不思議なことに、私の肩甲骨の痛みは、スッキリと治癒したのであった。インパール作戦には、三重出身の第151連隊の人達も参加していた。彼らの内、現地で散った人達数人が今回私と共に帰国されたのかもしれない。

インパール作戦の白骨街道慰霊の旅には、何かしら、スピリッツを慰める方法が必要なのかもしれない。先日のNHKのTV放送では、コヒマの住人は、今でも日本兵の幽霊が出るのだと、語っていた。





こんなことがあった!!当協会との不思議な縁も ビルマ(ミャンマー)独立を陰で 支えた日本船「春天丸」のはなし

国土交通省ミャンマー鉄道改善WG委員会(委員)
(一社)日本ミャンマー友好協会
副会長 高松 重信

アウンサン将軍(General Aung San)が戦前執務していた建物が現在、House of Memoriesと称するレストランになっており、海外国からの観光食事スポットとなっております。以前からヨーロッパの多くの人達が来ていました。最近、日本人も利用するようになってきました。このレストランにはGeneral Aung Sanに所縁のある写真が少なからず飾られています。しかし、あれだけ絆が深かった日本との関係を示す写真が一枚も掲示されていなかった。



浜松市の鈴木大佐宅で和服を着たアウンサン

1940年当時、Aung SanとYan Aungの二人がビルマ独立を心に抱き密かに日本に来ており、後に南機関長になられた鈴木大佐の自宅(浜松市)に匿われていました。

ビルマ(現ミャンマー)独立に深く関わった彼の有名な「南機関」は1941年(昭和16年)2月1日に大本営陸海軍部直属緬甸(ビルマ)工作機関として設立せられ、その後、大本営海軍部の手を離れ、大東亜戦争勃興と共に南方軍総司令部に隷属し、次いで第15軍林1611部隊に配属せられたる特務機関なった。

南機関の行動目的は次の通りあったと判断されている。

①大東亜共栄圏の樹立。

②ビルマ援蔭ルートの遮断。

③日本の絶対防衛圏の堅持

※大東亜共栄圏:Greater East Asia Co-prosperity Sphere=植民地を解放し共存共栄の国際秩序建設。

実際に南機関員はこの目的のためにビルマの地で大いに活躍し、現在に至っても、南機関員の方々にはミャンマーの人々から尊敬を受けている。

また、後に南機関の人々とアウンサンが率いるビルマ独立の志士により結成されたビルマビルマ独立義勇軍(Burma Independence Army, BIA)の初代司令官は鈴木BIA将軍(陸軍大佐)であり、二代目がアウンサン将軍であった。鈴木BIA司令官は今でもミャンマー人の間でボーモジョー鈴木(鈴木大将)と言って有名で且つ尊敬を受けています。

その行動実施計画の構想は次の通であった。

①独立の中核となるべきビルマ青年30名を密かに国外に脱出させ、武装蜂起に必要な軍事訓練を施す。

②その後、彼らに武器、資金を与えてビルマに再潜入させ、武装蜂起を促し、国内各地で独立政府の樹立を宣言する。



鈴木機関長

③南機関は泰(タイ)・緬(ビルマ)国境沿いの泰領内にビルマ青年を受け入れ、再投入する基地を設ける。

1941年2月1日に設立された南機関の鈴木機関長は次の作戦命令第一号「昭和1941年(昭和16年)2月14日」を南機関の杉井氏とAung Sanに発した。

杉井氏※1及びAung Sanはビルマ独立に是非必要な種々な知識・準備と軍事訓練を施すために、有名なビルマ独立の志士28名を日本へ密航させる目的で命令を受けた。明るく日に出向すると言う余りにも急激なことであったので、面食らったこともあったが、何とか処理し、南機関長の指導で偽装の船員手帳を貰い、船員服に身を包み川崎港からビルマ米買付の大同海運春天丸に乗りこんだ。命令受領した翌日の2月15日未明、船は川崎港を出港し、ビルマバセイン(Bassein/現pathein)港へ向かってたのである。

※1 杉井満氏⇒当協会の前身であった日本ビルマ文化協会が1972年(昭和47年)3月12日に創立総会が開催されており、来賓として参加されています。また、ビルマの第33回目の独立記念日に当たる1981年1月4日にアウンサン勲章授与されています。

春天丸はイラワジ河下流、米の積出港で有名なバセイン港に到着した。ビルマ脱出党員に渡すべき乗船の手配書、機密書類などを特殊用紙に書き写し、アウンサンは入れ歯である虫歯の穴に詰め、春天丸の機関長と船員2人と共にバナナを買う名目で税関の正門を突破し、林の中で素早くロンジを履いてビルマ人に返った。機関長達はオンサンが脱ぎ捨てた船員服を二重に着込み船に帰った。バセイン港を出港するとき、英国官憲が春天丸の船員点呼をし



たが、全ての書類を1名減らしていたのでアウンサンの脱出、潜入は全く気付かれなかった。

この行動劇は、詳細は割愛しますが、正に薄氷を踏む行動劇の連続であったと史実に書き遺されています。この脱出劇作戦は見事に成功し、この28名志士の日本密航がビルマ独立の大きな原因となったのである。

従って、この「春天丸」はビルマ独立に記念すべき船船であるといつて過言ではない。そこで、私はこの船を建造された三菱長崎造船所 資料館殿から春天丸の写真を頂き、今回(2017.4.21)、Aung San将軍の記念館であるHouse

of Memoriesレストランへ、それを寄贈し、下記の短い英文の説明を付記し「春天丸」の写真(A3版)をAung San将軍の元執務室に飾って頂きました。

※説明文には当協会名も記載しています。

この展示には当協会の平尾ご夫妻にお世話になりましたことを付記し御礼に代えさせていただきます。皆様方におかれては、ミャンマーを訪問されたおり、是非とも、このHouse of Memoriesレストランへ行かれ、食事をされながらAung San将軍所縁の写真などをご覧下さい。

Japanese ship【Shunten Maru】

General Aung San went on board "Shuntenn Maru" from Kawasaki Harbor for Myanmar with Mr. Sugii to accept 28 patriots of Myanmar (Burma) independence to Japan on February 15, 1941.

※ The photograph is presented on April 25, 2017 by

◇Mr.Shigenobu Takamatsu, the Japanese Myanmar friendship association (Vice Chairman)

◇Mitsubishi Heavy Industries, Ltd. Nagasaki Shipyard Museum



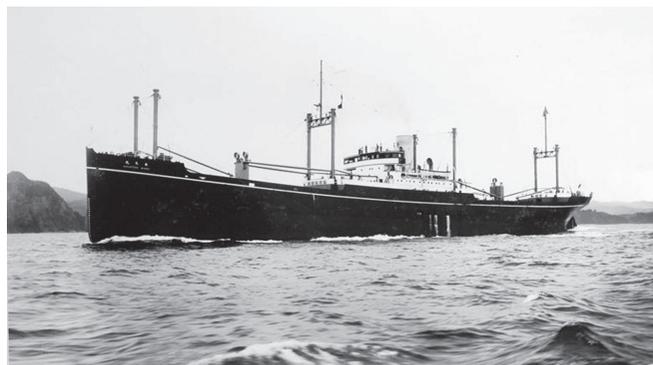
Aung San将軍の執務室に飾られた写真



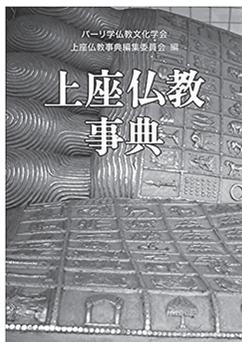
飾られた「春天丸」の写真



House of Memories レストラン



三菱長崎造船所資料館から受領した「春天丸」の原画



『上座仏教辞典』 発刊されました

ミャンマーのウ・ヴィジャナンド大僧正(14ページ)、当会相談役の池田正隆先生も執筆。

仏典研究と地域研究の両面から上座仏教を総合的に紹介した世界で初めての大著。執筆者103名。総説編・項目編・資料編からなる。

上座仏教の聖典・教義、修行・儀礼の実際などの教理面から、スリランカ・ミャンマー・タイ・ラオス・カンボジアにおける上座仏教の歴史と実践形態、

新刊書紹介

社会との関わりまで、幅広く解説。項目編は用語・人名・地名・仏典など735項目を収録。資料編は聖典・文献・教理など特にパーリ語のものが充実している。仏教学研究、東南アジア研究者、南アジア研究者に必読の書。

編：パーリ学仏教文化学会 Society for the Study of Pali and Buddhist Culture
発行：株式会社めこん 定価：12,000円+税



第72回文化庁芸術祭優秀賞を受賞の NHKスペシャル「戦慄の記録インパール」と慰霊法要

理事
松尾 義久



高野山・慰霊大法要の様子：前から3人目法主の仲下瑞法猊下とミャンマーのウ・ヴィジャンダ大僧正

昨年8月NHKで放映された「戦慄の記録 インパール」は、今年1月の再放送を含めご覧になった方も多いと思います。当協会の理事、水戸部麻里さ

んがプロデュースされています。大東亜戦争の中で歴史的敗北とされたインパール作戦。この無謀といわれた作戦に実際に従軍、銃弾をくぐり抜け生死の境から奇跡の生還を遂げられた当協会の会員がいらっしゃいます。

陸軍大尉、中西喜次さん(元当協会常務理事)と陸軍歩兵軍曹、榎原真一さん(元常務理事・会報編集担当)などです。すでにお二方も鬼籍に入ってしまった。かつて協会本部が京都にあった時代、会

報編集会議のあとなどに、ご二人から壮絶極まるインパール作戦退却の様子を伺ったことが何度かありました。武器も食糧もなく飢餓状態、まさに生き地獄のような敗退の中で多くの戦友を失われたのです。述懐されるのは戦後ここまでよくぞ生きて来た、今の平和な日本に感謝、先立たれた戦友に対しては毎朝合掌していると、ほほえみながら話されたことが深く印象に残っています。これをまとめた記事は2003年7月発行の会報126号に詳述されています。

この戦争で亡くなられた戦死者を悼み高野山で慰霊法要が行われました。

ビルマ方面戦没者大法要が開催されました =高野山成福院=

昨年7月15日(土)から16日(日)の2日間、恒例の大法要が行われました。戦後ずっと続けてこられたこの法要も今回で52回を迎えました。

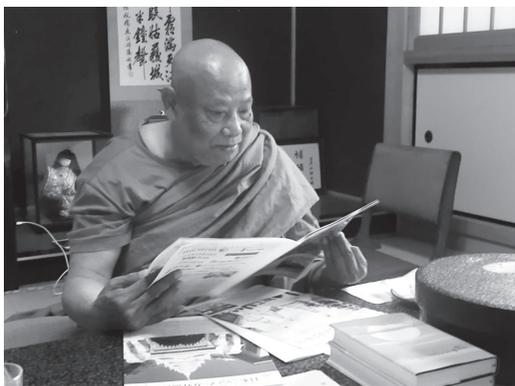
15日は成福院仰光殿で前夜祭、仲下瑞法法主の挨拶、来賓のビルマ僧ウ・ヴィジャンダ大僧正のお話、ミャンマー女子留学生によるビルマ舞踊が披露

されました。16日は早朝より摩尼宝塔で護摩供養、奥の院納骨塔バゴダで墓前祭、午前11時より摩尼宝塔で慰霊大法要。当、日本ミャンマー友好協会の発足当時の会員さん方も90歳から100歳を迎えられ、その多くは残念ながら鬼籍に入られました。



奥の院納骨塔バゴダで墓前祭：NHKテレビ取材も入った。手前で合掌されているのは当会相談役、池田正隆先生。

大僧正に“協会報”を見ていただきました



協会報を読まれるウー・ヴィジャンダ僧正 成福院にて

さっそく持参していた会報157号から160号までをお見せしました。うんうんとうなずきながら熱心に目を通していただきました。かって京都市内に協会本部があったときに来ていただいたこともあり、こういう活動は大事だねと、ご理解いただきました。

大僧正はミャンマー、ミエングヤン県生まれ。1964年に比丘出家され、1967年にダンマチャリア学位を取られました。1979年来日、宗教法人世界平和バゴダ(北九州市)に在住。戒律厳守のミャンマ

恒例の高野山での戦没者慰霊祭に来賓として参加されたミャンマーのウ・ヴィジャンダ大僧正。折よく成福院で面談いただく機会がありました。

一僧として上座仏教の布教、パーリ語教授活動をされました。長年日本に滞在の中で仏典解釈の指導や訳著も出版されています。2012年初めにミャンマーへ帰国されましたが、その後も日本へは招聘に応じて度々足を運ばれています。

会報前号(160号)で新刊書として紹介いたしました池田正隆先生訳注「ダンマ・ニティ・さとりの導き」の監修もされています。

また7年もの歳月をかけてようやく最近発刊された学会待望の「上座仏教事典」にもお二方が執筆されています。(編集：松尾義久)



本部からのお知らせ

当協会主催『小さな村の新任教師 Tomorrow』本編上映決まる

平成30年1月19日(金)、東京築地本願寺で、友好協会主催ミャンマー映画「小さな村の新任教師」を上映いたします。日本で上映されることが少ないミャンマー映画ですが、都会を遠く離れた学校に赴任した先生の理想と現実の相克に悩む姿を描いた作品です。

監督:トンアウンゾー

出演:ナウンナウン、ルーミン、メロディー、モース

2011年/ビルマ語/140分//日本語字幕付

2012年ミャンマー国内アカデミー賞8部門受賞しています。

脚本賞、助演男優賞、指導者賞、音楽賞、ベスト映画作品賞、ベスト主演女優賞、ベスト主演男優賞、監督賞。

入場無料

ミャンマーの初等教育について

映画 & シネマタム

2018年 1月19日(金) 13:00 開場

築地本願寺フェスティバル

1 13:30 2 18:30

小さな村の新任教師 Tomorrow

2012年ミャンマー国内アカデミー賞8部門受賞

ミャンマー教育改革

16:00 16:30

田中 義典

支部だより

ミャンマー支部

135以上のミャンマー民族の布でバッグをつくる“モリンガ”に工房を!

当協会のミャンマー支部で活躍されている水口知香さんの様子をお知らせします。

ミャンマーのテキスタイルを世界へとの意気込みでバッグ&インテリアファブリックの新ブランド「Moringa」を立ち上げた水口さん。彼女を含めたミャンマー在住の日本人女性ふたりの努力によるものです。昨年7月に東京でもポップアップショップで紹介されました。

ホームページによると、「MORINGA」という名前は、日本では「ワサビノキ」と呼ばれる、ミャンマーとインドを原産地とする落葉樹に由来しています。最近ではスーパーフードとしてもよく知られている、非常に強靱な生命力の強い木です。

現在彼女は、ミャンマーの伝統的な織物振興のために更なる活動をすすめています。家賃も高く交通網の安定しないミャンマー。住んでいるエリアから近い場所に工房を作り、スタッフが働きやすく技術が向上で



◀写真はホームページより▶

ミャンマー語の堪能な水口さんはスタッフの要望や話しを聞くお姉さんの存在。

きる環境を整えたいと日夜尽力されています。

またアジア太平洋地域の国々で「農村開発」「人材育成」「環境保全」「普及啓発」を行っている公益財団法人オイスカ(NGO)活動もされています。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://readyfor.jp/projects/13629>

関西支部

ミャンマー運輸通信省の副大臣及びミ国鉄副総裁御一行、壬生寺を表敬訪問

昨年11月18日JICAの招聘で来日されたミャンマー運輸通信省の副大臣及びミ国鉄副総裁御一行をミャンマーで長年鉄道指導をされ、今回一行に同行されている高松重信副会長と当協会の岡晃市(元当協会事務局長)が京都を案内しました。



前列右から:Aung Kyaw Win(招聘者)運輸通信省の副大臣、次官補佐、Kyaw Myo(招聘者)運輸・通信副大臣、壬生寺貫主・松浦俊海、Ba Myint(招聘者)ミャンマー国鉄副総裁

後列右から:内田エミ(国際交流サービス協会ミャンマー語通訳)、岡晃市(日本ミャンマー友好協会 会員)、紀古鮎美(JICAミャンマー事務所スタッフ)、Myat Thu Zar(JICAミャンマー事務所スタッフ)

京都では、京都鉄道博物館などを視察、鉄道に関する懇談の場も設けられ良き交流が行われた。他方、一行はミャンマーと大変に所縁のある壬生狂言や新選組の史跡で有名な壬生寺も訪問。壬生寺の松浦俊海貫主はミャンマーでの修行体験、留学もされており、当協会元常務理事でもあった。当寺は当協会の総会会場として何度も使わせていただいております。ミャンマー僧ウ・ヴァイジャナダ大僧正も法話をされたご縁がある。当日は岡晃市会員(滋賀在住)に案内役の労をとってもらった。



京都鉄道博物館にて

会費納入のお願い

当協会も新体制のもと、順調に運営を始めたいです。会費未納の方は下記新規口座に納入をお願いいたします。

- <年会費> 個人 10,000円
- 学生 3,000円
- 法人 50,000円

<振込先> 三菱東京UFJ銀行 新宿新都心支店 普通0376654 日本ミャンマー友好協会 都築治

会員増強をいたしております。お知り合いにミャンマーに興味のある方ございましたらご勧誘ください。

ミャンマー友好イベントでのミャンマー映画の上映に際し、協賛して頂いた企業の皆様です。大変ありがとうございました。



米粉製粉設備のことなら



グローバルビジネスサポート株式会社

株式会社 ブヨウ

編集後記

“ヤダナー”
ရဝနာ
[yadana]

偲ぶこと、祈ること

今号に掲載させていた
だいた楠田倫子様「夢
かなうミャンマーへの旅 そ
して父帰る」には心打たれ
ました。長年の懸案だった

慰霊のためのミャンマー詣で。その様子を淡々とお書きに
なっているだけなのですが、「生後すぐわかれた娘が、こ
んなに年老いて日本から迎えにきました。父さんの娘ですよ
とシタン河渡河作戦戦没者慰霊の碑前で号泣される記
述には、胸を熱くせずにはおられません。帰途につく折、

父への思いが胸に迫り「…なぜ
か私は倒れた」と記されていま
す。でも父との決別ではありません
でした、寄稿につけられたタイ
トルは「そして父帰る」なのです。

まさにこの状況と同じことを歌っ
たフォークソングが突然思い浮か
びました。詩人で劇作家でもあ
った鬼才、寺山修司作詞の「戦

争は知らない」です。

戦争の日を何も知らない だけど私に父はいない
父を想えば あ、荒野に 赤い夕陽が夕陽が沈む/
いくさで死んだ悲しい父さん 私はあなたの娘です
二十年後のこの故郷で 明日お嫁にお嫁に行くの/
見ていて下さいはるかな父さん いわし雲とぶ空の下…
と。

思えば今年で戦後73年、人ならば古希をとうに過ぎまし
た。記憶も薄れる遙か遠い昔です。でも偲ぶ、祈ることは
続いております。和歌山の高野山・成福院での「ビル
マ方面戦没者並びに物故者慰霊大法要」は恒例により
毎年開催されています。毎回慰霊祭の世話役をされていた
のはビルマ戦線から奇跡の生還を遂げられた帰還兵の
方々でした。当協会（発足当時は“日本ビルマ文化協
会”）の役員でもあったその皆さまも、今ではほとんど鬼籍
に入ってしまったされました。流動する世界情勢ですが、ま
ざれもなく、この平和日本の現在の礎をつくられた方々です。
その面影を偲びつつ感謝の祈りを捧げたいと思います。

今号も多方面からの原稿をいただきました。楠田様はじ
め、ご寄稿いただいた皆さま、まことに有難うございました。

編集松尾 義久



今号から登場するイラストは“とみざわ えりこ”さん(東京在住)です。